

「はい」と「いいえ」の一考察 —肯定、否定という2つの選択肢を有しない相手の 質問に対する用法の考察—

渡邊 真

キーワード： はい いいえ WH疑問文 捉え方 前提

1. はじめに

現代日本語の「はい」と「いいえ」には、肯定、否定という2つの選択肢を有しない相手の質問に対する共通の用法が観察される。

(1) 「どんなひとの詩を読みましたか?」「はい、ハイネを読みました。
ホイットマンも読みました!」¹ (林芙美子『放浪記』新潮 100)²

(2) 「体はどうじゃ?」「いいえ、まだはかばかしゅうはござりませぬ」
(司馬遼太郎『国盗り物語』新潮 100)

(1)の「はい」は、肯定、否定という2つの選択肢を有しない相手の質問に対して、質問の答えに該当する後続の発話を伴い、生起している。また、(1)の「はい」は後続の発話を変えずに「いいえ」と言い換えることはできないが、(2)の「いいえ」は、後続の発話を変えずに「はい」と言い換えることが可能である。

本稿では、肯定、否定という2つの選択肢を有しない相手の質問に対する「はい」と「いいえ」を考察対象とし、両語が(話者が相手の質問を手掛かりに捉えた)「相手の質問が前提とする考えの内容」に対する肯否関係にあるという観点で分析をおこない、両語の有する意味を記述する。

以下、本稿の構成について簡単に述べる。

2節では、先行研究の検討と本稿の目的を提示する。3節では、本稿の分析の観点を述べる。4節では、分析を提示する。5節では、意味記述を検討する。6節では、簡単に本稿のまとめを述べる。

2. 先行研究と本稿の目的

本稿の考察対象である肯定、否定という2つの選択肢を有しない相手の質問に対して用いられる「はい」と「いいえ」の対応関係を考察した先行研究は、管見の限りでは見当たらない。³ただし、肯否の選択肢を有しない質問に対する「はい」の意味は、渡邊(2013)の記述で説明が可能であり、肯否の選択肢を有しない質問に対する「いいえ」の意味は、渡邊(2014)に記述されている。

渡邊(2013)は、「はい」が有する6つの意味を記述している。以下に、その中のひとつである多義的別義4〈相手からの〉〈ある程度想定していた〉〈発話に対して〉〈受け取りを〉〈示す〉の典型例としてあげられている例の一部を引用する。⁴(下線と出典は渡邊(2013)のママ)

- (3) 「加能くんにおまえの監督をたのんでおいた。若い社員には容赦のない男だ。社長の息子だということ意識していたら、びしゃっとやられる。」「はい」「それからもうひとつ(以下略)」(立原正秋『冬の旅』新潮 100)

(3)の相手の発話は、肯否の選択肢を有しない質問ではない。しかし、(3)の「はい」と肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する(例えば1節の(1)のような)「はい」との間には、相手の発話に対する反応だという点と、その発話の内容に対して何らかのことを示したものであるという点で共通性を導くことができる。したがって、(3)の「はい」と肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」は、各々の有する機能が「相手の発話を聞いているということを示す」、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にあることを示す」という点では異なるが、共に多義的別義4の意味を有する語だと説明できる。

次に、肯否の選択肢を有しない質問に対する「いいえ」の意味は、渡邊(2014)で「いいえ」が有する6つの意味の中のひとつである多義的別義4として記述がなされている。以下に、その典型例としてあげられている例の一部を引用する。(下線と出典は渡邊(2014)のママ)

- (4) 「離婚の相手はどんな人だったんだろうね」「いいえ、知りませんわ」
(坂上 弘『近くて遠い旅』中央公論新社：中納言)

(4)の「いいえ」は、話者が話題に上がっている離婚歴のある人物の離婚の相手がどんな人か知っているだろうという(相手の)考えを捉え、それに否定判断を示したものの、すなわち〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉語だとされている。

このように、個別になされた渡邊(2013)と渡邊(2014)での記述は、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する両語の説明として妥当だと思われる。しかし、「はい」が肯否の選択肢を有しない質問に対して単なる〈受け取りを〉示し、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にあることを示す」という機能を有する語であり、「いいえ」が〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉語であるならば、例えば1節の(2)において「はい」と「いいえ」が共起する「はい、いいえ、まだはかばかしゅうはござりませぬ」という発話がなされる可能性があると考えられるが、この発話の容認度は低いと思われる。このことを踏まえ、靱山(2016:513)が典型的な多義語の各意味が相当程度の自立性を有するものであると判断する方法のひとつとしてあげている「くびき語法」⁵に倣って「はい」に関する以下のような文を作成する。

- (5) ? 「加能くんにおまえの監督をたのんでおいた。若い社員には容赦のない男だ。社長の息子だということを意識していたら、ぴしゃっとやられる」にも「お前は どう 思っている？」にも「はい」と言い、「単なる一社員という意識でいます」と答えた。

(5)は不自然である。これは、「はい」という語に想定される異なる複数の意味が、「(前略)ぴしゃっとやられる」という相手の発話と「お前は どう 思っている？」という相手の肯否の選択肢を有しない質問によって同時に活性化されるためだと考えられる。このように、「(前略)ぴしゃっとやられる」という相手の発話に対する「はい」と「お前は どう 思っている？」という相手の肯否の選択肢を有しない質問に対する「はい」の意味は、相当程度の自立性を有するものだと言えることから、再検討が必要だと考えた。

本稿では、肯否の選択肢を有しない質問に対する「はい」と「いいえ」の有する意味の対応関係に注目し、両語の意味の記述に取り組むことを目的とする。

3. 分析の観点

本節では、分析の観点を提示する。

本稿では、益岡・田窪(1992:139)の見解を分析の観点とする。(6)は、益岡・田窪があげている例の引用である。

- (6) 甲：花子に会わなかったのですか。

乙：はい、(あなたが言う通り)会わなかったですよ。

いいえ、(あなたは会ったと考えているようですが)会わなかったですよ。

(6)の甲の発話は、否定形で表された真偽を問う質問である。それに対して「会わなかったですよ」という同じ後続の発話を伴い生起する(6)の「はい」と「いいえ」は、乙が(甲の質問を手掛かりに)甲が質問をする際におこなった判断を「(乙は)花子に会わなかった」、「(乙は)花子に会った」というように、2通りに捉えることが可能であることから選択されたものだとされている。このように、(6)の「はい」と「いいえ」は、(甲の質問を手掛かりに)乙が捉えた甲の質問が前提とする2通りの考え(の内容)に対する語であり、さらに、両語は肯否関係にあるという。

(6)の相手の発話は、肯否の選択肢を有しない質問ではない。しかし、(6)の「いいえ」と2節で提示した渡邊(2014)の肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「いいえ」が有する意味との間には、話者が(相手の質問を手掛かりに)捉えた相手の質問が前提とする考え(の内容)に対する語だという点と、それに対して否定判断を示したものだという点で共通性が窺える。さらに、(6)の「はい」と「いいえ」が、「会わなかったですよ」という同じ後続の発話を伴い生起しているのと同様に、例えば1節でとりあげた(2)において、後続の発話を変えずに「いいえ」を「はい」と言い換えることができるという、すなわち、両語が同じ後続の発話を伴い生起可能だという点でも共通性が窺える。

本稿では、前述の共通性を踏まえ、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」と「いいえ」が、話者が(相手の質問を手掛かりに)捉えた相手の質問が前提とする考え(の内容)に対する語であり、(両語が)それに対して肯否を示す、すなわち、対立する語だという観点で分析をおこなう。

4. 分析

本節では、分析を提示する。4.1節では、肯否の選択肢を有しない相手の質問に対して同じ後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」を分析する。4.2節では、4.1節の考察を踏まえ、肯否の選択肢を有しない相手の質問に対して異なる後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」を分析する。

4.1 同じ後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」の分析

本節では、肯否の選択肢を有しない質問に対して同じ後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」の分析を提示する。まず、例を見てみよう。

- (7) 「体はどうじゃ」「はい／いいえ、まだはかばかしゅうはござりませぬ」
(作例)⁶

(7)は、相手である殿が、病気で伏せっている話者に「体はどうじゃ」と尋ねている場面である。それに対して話者は、肯否の選択肢を有しない質問に対する答えである「まだはかばかしゅうはござりませぬ」という同じ後続の発話を伴い、「はい」、あるいは「いいえ」と言うことができる。

(7)の「はい」と「いいえ」は、肯否の選択肢を有しない質問に対して肯否の判断を示したものだとは考えられない。そこで考えられる観点は、話者が「体はどうじゃ」という質問を手掛かりに、この質問の前提となる相手の考えを捉え、それに対して肯否の判断を示しているのではないかと、という点である。「体はどうじゃ」という質問から捉えられる(この質問の前提となる)相手の考えには、様々なものがあると思われる。ただし、(7)で話者は病気で伏せっており、質問に対する答えとして「まだはかばかしゅうはござりませぬ」と言っている。このことから、話者が「体はどうじゃ」という相手の質問を、(話者の)体の具合が快復傾向にあるか否か、という相手の考えを前提として発せられたものとして捉えたのではないかと考えられる。話者が、このような前提を捉えたと考えるならば、(7)の「はい」は、「(話者の)体の具合が快復傾向にないだろうという(あなたの)考えは妥当だ」ということを示していると捉えられ、「いいえ」と言った場合には、「(話者の)体の具合が快復傾向にあるだろうという(あなたの)考えは妥当ではない」ということを示していると捉えられる。したがって、(7)の「はい」と「いいえ」は、話者が(相手の肯否の選択肢を有しない質問を手掛かりに)捉えた相手の肯否の選択肢を有しない質問が前提とする 2 通りの考え(の内容)に対して肯否の判断を示したものだと考えられる。

このような検討を踏まえると、(7)の「はい」を、渡邊(2013)の記述を基に、〈受け取りを〉〈示す〉意味を有した上で「相手の肯定、否定という 2 つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にあることを示す」機能を有する語だと説明するよりも、話者が〈相手の肯定、否定という 2 つの選択肢を有しない質問を手掛かりに捉えた〉「(話者の)体の具合が快復傾向にないだろう」という〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉語だと説明する方が妥当だと考えられる。一方で、「いいえ」は、基本的には渡邊(2014)の記述通りに、話者が〈相手の肯定、否定という 2 つの選択肢を有しな

い質問を手掛かりに捉えた)「(話者の)体の具合が快復傾向にあるだろう」という(相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して)〈否定判断を〉(示す)語だと言える。

ところで、(7)における話者の肯否の選択肢を有しない質問の答えは「まだはかばかしゅうはござりませぬ」というネガティブなものである。以下で、話者の答えがポジティブなもの、「少しだけよくなりました」の場合を検討する。

(8) 「体はどうじゃ」「はい／いいえ、少しだけよくなりました」 (作例)

(8)においても、(7)と同様に、話者は同じ後続の発話である「少しだけよくなりました」を伴い、「はい」、あるいは「いいえ」と言うことができると考えられる。(ただし、(8)の「いいえ」は、非常に限定的な場面での用法だと考えられる。例えば、相手の見舞いが初めてではなく、複数回に渡っており、これまでは、話者が「体はどうじゃ」の問いに答える声すら満足に出ていなかったという状況を経た場面であれば、「いいえ」の生起は自然だろう。)さらに、(8)における両語も、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問を手掛かりに捉えた〉2通りの〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して)肯否の判断を示したものだと考えられる。ただし、後続の発話である「少しだけよくなりました」がポジティブな答えであることから、(8)の「はい」は(7)の「いいえ」が否定判断を示した「(話者の)体の具合が快復傾向にあるだろう」という捉え方に対して肯定判断を、(8)の「いいえ」は(7)の「はい」が肯定判断を示した「(話者の)体の具合が快復傾向にないだろう」という捉え方に対して否定判断を示していると言える。この結果を表にする。

表 1 「体はどうじゃ」に関する2通りの捉え方と話者の発話

話者が捉えた相手の考え(の内容)	話者の発話	相手の考え(の内容)に対する肯否
体の具合が快復傾向にあるだろう	はい、少しだけよくなりました	肯定判断
	いいえ、まだはかばかしゅうはござりませぬ	否定判断
体の具合が快復傾向にないだろう	はい、まだはかばかしゅうはござりませぬ	肯定判断
	いいえ、少しだけよくなりました	否定判断

以上の考察から、肯否の選択肢を有しない質問に対して(質問の答えである)同じ後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」は、対立する2通りの捉え方に対して、意味特徴の一部が対立した肯否関係にある語だと言える。

4.2 異なる後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」の分析

本節では、4.1節での分析を踏まえ、肯否の選択肢を有しない質問に対して異なる後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」を分析する。2つの例を見てみよう。

(9) 「どんなひとの詩を読みましたか?」 「はい、ハイネを読みました。ホイットマンも読みました」
(=(1))

(10) 「離婚の相手はどんな人だったんだろうね」 「いいえ、知りませんわ」
(=(4))

(9)は、詩人になることを目的に原稿を持ちこんだ話者が、原稿を受け取った相手から「どんなひとの詩を読みましたか」と尋ねられている場面である。それに対して話者は、肯否の選択肢を有しない質問に対する答えである「ハイネを読みました。ホイットマンも読みました」という後続の発話を伴い、「はい」と言っている。(10)は、妻である話者が、夫と話途中で話題にのぼっていた離婚歴のある女性について、相手である夫から「離婚の相手はどんな人だったんだろうね」と尋ねられている場面である。それに対して話者は、肯否の選択肢を有しない質問に対する答えを持っていなかったようで「知りませんわ」という後続の発話を伴い、「いいえ」と言っている。

(9)の「はい」も(10)の「いいえ」も、肯否の選択肢を有しない質問に対して肯否の判断を示したものだとは考えられない。そこで考えられる観点は、話者が(9)では「どんなひとの詩を読みましたか」、(10)では「離婚の相手はどんな人だったんだろうね」という質問の前提となる相手の考えを捉え、それに対して肯否の判断を示しているのではないか、という点である。

(9)の「どんなひとの詩を読みましたか」という質問から捉えられる(この質問の前提となる)相手の考えは、「(話者が)誰かの詩を読んでいるだろう」というものに限定されると考えられる。なぜならば、質問に「ひとの詩を読みました」という、それを直接的に捉えることができる要素が含まれており、(9)では後続の発話を変えずに「いいえ」と言うことはできないからである。したがって、

(9)の「はい」は、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉「(話者が)誰かの詩を読んでいるだろう」という〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉語だと言える。一方で、(9)で「いいえ」を用いた場合には、「いいえ」は、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉「(話者が)誰かの詩を読んでいるだろう」という〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉語であり、その後には、例えば「実は、誰のものも読んでいないんです」などが続く。すなわち、(9)における「はい」と「いいえ」は、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉同じ〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉肯否関係にある語だと考えられる。

(10)の「離婚の相手はどんな人だったんだろうね」という質問から捉えられる(この質問の前提となる)相手の考えは、「(話者が)離婚の相手がどんな人か知っているだろう」というものに限定されると考えられる。なぜならば、質問に「ね」という、それを直接的に捉えることができる要素が含まれており、(10)では後続の発話を変えずに「はい」と言うことはできないからである。したがって、(10)の「いいえ」は、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉「(話者が)離婚の相手がどんな人か知っているだろう」という〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉語だと言える。一方で、(10)で「はい」を用いた場合には、「はい」は、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉「(話者が)離婚の相手がどんな人か知っているだろう」という〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉語であり、その後には、例えば「ずいぶん歳の離れた人だったようよ」などが続く。すなわち、(10)における「はい」と「いいえ」も(9)と同様に、話者が〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉同じ〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉肯否関係にある語だと考えられる。

以上の考察から、(9)と(10)の「はい」と「いいえ」は、話者が相手の肯否の選択肢を有しない質問から直接的に捉えた、同じ捉え方に対して、意味特徴の一部が対立した肯否関係にある語だと言える。なお、このような発話環境において「はい」が生じた場合には、〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉という意味を有した上で、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にあることを示す」機能

を有し、「いいえ」が生じた場合には、〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉という意味を有した上で、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にないことを示す」機能を有する語だと言えるだろう。

5. 肯否の選択肢を有しない相手の質問に対する「はい」と「いいえ」の意味記述の検討

本節では、4節における分析から記述した、肯否の選択肢を有しない質問に対して、同じ後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」の意味と、異なる後続の発話を伴い生起する「はい」と「いいえ」の意味を提示する。さらに、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」と「いいえ」が有する意味の妥当な記述を検討する。

まず、4.1節の分析では、「はい」の意味を〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問を手掛かりに捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉、「いいえ」の意味を〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問を手掛かりに捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉と記述した。

次に、4.2節の分析では、「はい」の意味を〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉、「いいえ」の意味を〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉と記述した。さらに、両語が、このような意味を有した上で、それぞれ、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にあることを示す」、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にないことを示す」という機能を有するとすることも指摘した。

以上の分析結果を踏まえ、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」と「いいえ」が有する意味の妥当な記述を検討する。

4.1節の分析における「はい」と4.2節の分析における「はい」は、「いいえ」と言い換えた場合の発話環境が、同じ後続の発話を伴い生起するか、異なる後続の発話を伴い生起するかという点で異なる。加えて、肯否の選択肢を有しない質問が前提としている相手の考えを、話者が〈質問を手掛かりに捉えた〉のか、〈質問から直接的に捉えた〉のか、という違いがある。ただし、〈相手の質

問が前提としている考え(の内容)に対して)〈肯定判断を〉〈示す〉という点では共通している。また、4.1節における「はい」の用法においても、4.2節と同様に、話者は「はい」に後続する発話で質問に対する答えを述べていることから、この場合の「はい」も「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にあることを示す」という機能を有する語だと言える。したがって、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」の妥当な意味記述は、4.1節と4.2節の分析による2つの意味の共通性を抽出したものだと考えられる。これは、下記に作成した文が自然に感じられ、つまりは「くびき語法」にならないことにもよる。

- (11) 「どんなひとの詩を読みましたか」にも「詩を書く生活はどうか」にも「はい」と言い、「ハイネを読みました、ホイットマンも読みました」「なかなか厳しいです」と答えた。

一方で、4.1節の分析における「いいえ」と4.2節の分析における「いいえ」は、〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して)〈否定判断を〉〈示す〉という点では共通するが、「はい」と言い換えた場合の発話環境が、同じ後続の発話を伴い生起するか、異なる後続の発話を伴い生起するかという点で異なる。加えて、前提としている相手の考えを、話者が〈質問を手掛かりに捉えた〉のか、〈質問から直接的に捉えた〉のか、という違いがある。さらに、4.2節における「いいえ」の用法において、話者が後続する発話で質問に対する答えを述べていないことから、「相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して答える体勢にないことを示す」という機能を有する語だと言えるが、4.1節では、後続する発話で質問に対する答えを述べているので、同じ機能を有する語だとは言えない。したがって、4.1節と4.2節の分析による2つの記述は、共に、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「いいえ」の妥当な意味記述として必要だと考えられる。これは、下記に作成した文が不自然に感じられ、つまりは「くびき語法」であることにもよる。

- (12)? 「離婚の相手はどんな人だったんだろうね」にも「生活はどんな状態なんだろう」にも「いいえ」と言い、「知りませんわ」「暮らしにお困りのようには見えないわね」と答えた。

このような検討を踏まえ、本稿では、肯否の選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」と「いいえ」の妥当な意味記述を、下記のものとする。

「はい」：〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈肯定判断を〉〈示す〉

「いいえ」：〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉

「いいえ」：〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問を手掛かりに捉えた〉〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉

この結論は、渡邊(2013)で記述されている「はい」が有する6つの意味記述に上記の1つの意味を加えることと、渡邊(2014)で記述されている「いいえ」が有する多義的別義4、〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉〈否定判断を〉〈示す〉に〈相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から直接的に捉えた〉という意味特徴を加えるという修正だけではなく、4.1節で記述した意味を新たに加えるべきことを指摘するものである。

6. おわりに

本稿では、相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問に対して生起する「はい」と「いいえ」の対応関係に注目し、意味記述の再検討をおこなった。そして、両語の意味記述を提示し、両語が相手の肯定、否定という2つの選択肢を有しない質問から捉えた〈相手の質問が前提としている考え(の内容)に対して〉意味特徴の一部が対立した肯否関係にあることを明らかにした。

注

- 1 実例の下線は引用者による。相手の発話には粗い点線を、考察対象には実線を、考察対象に後続する同一人物の発話には細かい点線を施してある。
- 2 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』を用いて採集した例文の出典は書名を『 』で括り、その後「新潮100」と略記してある。インターネット上で公開されている中納言を用いて採集した例文に関しては、書名を『 』で括り、発行所名を記載後、「中納言」と記載してある。引用者による作例は、作例と記載してある。

- 3 これに該当する質問を、以下、本稿の説明において「肯否の選択肢を有しない質問」と略記する。
- 4 個々の多義的別義の意味、あるいは意味間における共通の意味は〈 〉で括って示す。
- 5 靱山(2016:513)は、Cruse(1986:12-13, 61-62)を踏まえて、くびき語法(zeugma)を「1つの句・文等において、1つの語が異なる意味を担うことにより、不自然に感じられること」と定義している。
- 6 (7)は(2)の実例に「はい／」を加えたものである。

参考（引用）文献

- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版：東京
- 靱山洋介(2016)「多義語の多様性：典型的な多義語と単義語寄りの多義語」『日本認知言語学会論文集』16, 512-517. JCLA
- 渡邊 真(2013)「現代日本語「はい」の意味分析」、『言葉と文化』14,165-180.名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・日本言語文化専攻
- 渡邊 真(2014)「現代日本語「いいえ」の意味分析」『言葉と文化』15,75-91.名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・日本言語文化専攻

例文出典

CD-ROM 版 新潮文庫の100冊

KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/login/> (2013年5月24日)